

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：42621

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04951

研究課題名（和文）医療保育の質を評価するシステムの構築-入院児とその家族のQOL向上に向けて

研究課題名（英文）Develop a System to Evaluate the Quality of Care and Education in Pediatrics : Improving the Quality of Life of Hospitalized Children and Their Families

研究代表者

上出 香波（Kamide, Kanami）

駒沢女子短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：80757427

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、病棟保育の現状把握および病棟保育に関する自己チェックリストを作成することを目的とした。2018年と2020年に医療機関に勤務する保育士を対象とした質問紙による全国調査を実施した。さらに、機縁法により抽出した22名の病棟保育士に対してインタビュー調査も実施した。質問紙での調査データは統計学的に分析し、インタビュー結果に対してはテキストマイニングによる処理を行った。結果、専門性の認知、自己研鑽、多職種協働、病棟保育の業務マニュアルの整備などの点において課題が認められた。本研究結果を基に、医療保育に関する質の担保を目的とした自己評価チェックを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2018年と2020年に実施された病棟保育の全国調査により、現状を正確に反映した基礎データが得られた。量的調査と質的調査を組み合わせ、全国的な視点から病棟保育の現状や課題を詳細に調査分析し、医療保育の質に必要な要素を抽出することができ、得られた結果をもとに、慎重な検証を経て妥当な評価表が作成され、公開された。病棟保育士はこの評価表を用いて自己評価を客観的に行うことができ、医療保育の振り返りや課題の抽出にも役立つといえる。また、評価システムによって医療保育の質が明確化されることで、入院児とその家族への質の高い保育支援が提供され、QOLの向上に貢献するとともに、社会的な意義があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to investigate the current status of pediatric care and education and to develop a self-checklist for pediatric care and education. A national survey was conducted using a self-administered questionnaire to nurseries involved in pediatric care and education in 2018 and 2020. In addition, an interview survey was conducted with 22 nurseries involved in pediatrics, selected by snowball sampling. The data obtained from the questionnaire were statistically analyzed, and the interview results were processed by text mining method. As a result, recognition of expertise for child care in medical situation, self-improvement, cooperation with other health care professionals, and arrangement of work manuals for care and education in pediatrics were identified as specific issues related to care and education in pediatrics. Based on the results of this study, a self-assessment checklist was developed to maintain/improve the quality of pediatric nursing care and education.

研究分野：特別支援教育

キーワード：医療保育 病棟保育 保育士 医療保育専門士 保育の質 入院児のQOL チーム医療 自己評価

1. 研究開始当初の背景

(1) 入院児の生活の質と医療保育の推進

病気により入院加療が必要となった子どもは、医療現場という特殊な環境下で生活を強いられる。結果として、身体的苦痛や家族からの分離不安等の心理的影響や成長・発達の遅れといった影響があることが知られている¹⁾。そのため、保育士が「遊び」などの援助・支援を行い、入院児の発達や家族の支援を保障し、子どもと家族の生活の質(QOL)の向上を図ることが重要である。入院児や家族のQOL向上を図るために、厚生労働省の「病棟保育導入推進事業(1998年度)」、「健やか親子21(2000年度)」、医療保険制度の「プレイルーム・保育士加算(2002年度)」により、施策としても医療機関への保育士の導入が推進されるようになってきた。

(2) 医療保育の専門性

医療保育のひとつである病棟保育は、1954年に日本で初めて聖路加国際病院小児病棟に保育士が導入されたが、その後全国的な導入は殆ど進まず²⁾、1998年の病棟保育導入推進事業から本格的に導入が進んだ経緯から鑑みても非常に歴史が浅い。そのため、医療保育の専門性が定義されることなく経過してきた。入院児のQOLを向上させるためには、医療保育の専門性の定義と携わる保育士の質の担保が必要不可欠であった。そこで、関東近郊の病棟保育に携わる保育士については、医療保育の専門性に関する質的研究を行い、医療保育の専門性の構造を明らかにしてきた³⁾。

(3) 医療保育における課題

医療保育の専門性を明らかにする過程で、同時に医療保育の現場で生じている課題があることも示唆された^{3,4)}。医療保育の先行研究自体が少ない中、医療保育の課題に関する先行研究も少ない。そのうえで医療保育の導入促進における課題として、行政による環境整備についての指摘はある¹⁾。しかし、医療保育の現場での具体的課題については殆ど明確にされていない。このような状況を踏まえ、2005年の長嶋による調査⁴⁾以降、全国規模での医療保育の調査は皆無であり、実態調査を行い、そのうえで課題に関してのアンケート調査が必要であることも示唆された。

2. 研究目的

小児の病棟保育士の保育の実態と課題を1回目のアンケート調査(量的調査)および面接調査をおこない、明らかにする。結果を解析し、分析結果を基に病棟保育士自身が自分の保育に対して自己評価するための評価表を構築する。2回目のアンケート調査において、作成した自己評価チェックリストを調査内容に掲載し、自己評価チェックリストの妥当性を検証する。

自己評価チェックリストが臨床の病棟保育士の活用に繋がり、医療保育の質の向上に寄与できることを目的とする。

3. 研究方法

(1) 対象者

初年度および2年後に実施のアンケート調査は、全国の小児病棟を有する医療機関に勤務する病棟保育士を対象とした。対象となる病棟保育士の抽出は、病棟保育士が勤務している、または勤務している可能性があると思定された施設として、2017年9月に検索したインターネット公開情報「公益社団法人 日本小児科学会 小児科専門医研修施設」および「日本医療保育学会 医療保育専門士名簿」からおこなった。1回目のアンケート調査後に実施したインタビュー調査は、機縁法にて抽出した小児病棟に勤務する保育士を対象とした。

本研究における倫理的配慮として、研究実施にあたり共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会(承認番号:KWU-IRBA#17125)、明星大学研究倫理委員会(承認番号2019-016)の承認を得て実施した。また、アンケートへの回答は個人が特定できないよう匿名での回答とした。アンケートへの回答は自由であること、調査票への回答をもって研究協力への同意と、説明した文書を調査票に添付して郵送した。インタビュー調査では、研究目的および内容について、口頭および書面にて説明を行ない、書面による研究参加への同意を得た。

(2) 調査方法

対象者として抽出された施設に勤務する病棟保育士へ郵送法にて 2018 年と 2020 年の 2 回のパネル調査を実施した。病棟保育士が勤務している、または勤務している可能性があるとして抽出された全国の医療機関へ自記式アンケート調査票を郵送法にて配布および回収した。対象とした医療機関に病棟保育士が複数名在籍している施設もあり、その場合には 1 施設に対して複数部のアンケート調査票を同封して郵送した。そのため、抽出した医療機関の施設数に対して、送付したアンケート調査票の部数は多くなっている。

第 1 回目の調査は、557 施設に計 665 部の自記式アンケート調査票を 2017 年 11 月から 2018 年 1 月までに郵送にて配布した。第 2 回目の調査は、547 施設に計 694 部の自記式アンケート調査票を 2020 年 3 月から 2020 年 4 月までに郵送にて配布した。なお、第 2 回目の調査では、第 1 回目の調査において不在の回答施設を削除した一方で、保育士が複数在籍と回答した施設にはアンケート用紙部数を増やして送付した。なお、調査内容は、先行研究における病棟保育士に関する調査内容^{3,4)7,8)}から必要項目を抽出した調査項目と職務満足感に関する尺度の内容⁹⁾から抽出した調査項目で作成した。さらに、病棟保育に関する自己評価に関して、保育者の自己評価チェックリスト評価項目の内容⁶⁾と第 2 回目は病棟保育士のインタビュー調査・分析を基に独自で作成した調査項目も追加した。

インタビュー調査は、機縁法にて抽出した小児病棟に勤務する保育士 22 名を対象とした。対象者へは半構造化面接法による面接調査をおこなった。なお、質問内容は「病棟保育の現状」、「病棟保育の課題」、「病棟の保育士としての今後の目標」、「病棟の保育士として、保育において入院している子どもや家族のために必要なことや大切にしていること」の 4 項目とした。インタビューの内容については、対象者の同意を得たうえで全て IC レコーダーを用いて録音した。

(3) 分析方法

すべてのアンケート項目を単純集計した。単純集計から、必要項目に応じて統計学的分析を統計解析ソフト R programming language environment (R version 3.4.1)¹⁰⁾および EZR (version 1.36)¹¹⁾を用いて分析を行なった。統計学的有意水準は 5%とした。

小児病棟の保育士のインタビュー内容については、KH Coder を使用してテキストマイニングをおこなった。分析では、インタビュー内容を単語に分解し、各単語の出現頻度に対してクラスター分析を行った。各クラスター内に含まれる単語と単語が使われている文脈から整理した。

4. 研究成果

(1)小児病棟の病棟保育の現状と実態の結果

アンケート調査は小児病棟の病棟保育士を対象として、病棟保育の現状と実態を明らかにするために全国調査を 2 回実施した。1 回目の調査 (2018 年) で 230 名、2 回目の調査 (2020 年) で 252 名より回答を得た。2 回の単純集計結果において、差分で 10% 以上の変化がみられた項目はすべてのアンケート結果から 2 項目のみであり、顕著に変化した項目は殆どみられなかった。2 回の調査結果から病棟保育の現状と課題を把握するための基礎データを得ることができた。

調査結果の中で、多少であるが変化したこと、変化がないことにより着目する必要があると思われた項目はあった。回答対象者の基本属性、勤務状況において、2018 年と 2020 年で割合が変化した項目として、2020 年では 2018 年よりも保育士経験年数「26 年以上」が 6.1%、役職が「有り」が 2.8%、直属の上司が「保育士」が 8.8%、それぞれ増加した。病棟保育としてのキャリアはあまり変わらないが、直属の上司が「保育士」との回答がやや増えた。勤務地については、2020 年のみ調査を実施した。「関東地方」が 41.7% と半数近くであり、「中国・四国地方」が 4.4% と少なかった。地方により病院の実数が異なる可能性も否めないが、保育士が勤務している病院には地域の偏在があることが示された。

日常の保育士の業務内容では、2020 年調査において“遊びの提供・援助”、“プレイルーム、玩具等の保育環境整備”の項目で「行わない」という回答があった。自由記述に保育士であるが看護助手業務が主であり、保育をおこなうことができている等と、保育業務ができないことを記載されている保育士もおり、少数であるが医療の中での専門性を生かすことができな立場の保育士も実際にはいる。しかし、全体で見ると“ベッドメイキング”や“配膳”のような看護助手との兼務と思われる項目が 2020 年は微減していた。

実際の病棟保育に関する内容では、病棟の保育業務マニュアルが「ある」との回答が2020年には11.3%増加した。これは病棟の保育業務の明確化にも繋がっていると考えられた。保育記録の記述の有・無については殆ど変化みられなかったが、記録の媒体が「電子媒体」との回答が11.1%増加した。近年のIT化やペーパーレス等に伴い、殆どの医療機関がカルテは電子カルテ化している状況も鑑み、保育記録も同様に電子媒体に変化しているのではないかと考えられた。多職種とのカンファレンスに「参加している」との回答も7.5%増加していた。その中で、保育計画については2回の調査ともに、保育計画を「立てていない」が60%以上であり、2020年では保育計画を「立てる必要はないと思っている」が7%増加していた。

勉強会・研修、自己研鑽、業務評価については、医療、看護に関する勉強会・研修へ「参加している」は5.8%減少しており、「医療に関する自己研鑽をしていますか」とについても「どちらかといえば思う」・「思う」が3.1%減少していた。病棟保育分野に関する相談やアドバイスを頂く方が「いない」が半数程度いることもわかった。

チーム医療、他職種協働の認識は、看護師と協働できていると「思う」・「どちらかといえば思う」が3.2%減少していた。仕事については、2回の調査ともに「自身の仕事を通じての成長した仕事に遣り甲斐がある」とについては、「思う」・「どちらかと言えば思う」が90%以上であるが、「この職場にいて着実な人生設計が立てられると思うや仕事の成果と給与の釣り合いが取れていると思う」は、「思う」・「どちらかというと思う」は半数であること、「よい仕事をして昇進できる」とについては、「思わない」・「どちらかといえば思わない」が60%以上であった。医療現場における保育士の立場については課題があると考えられた。

(2) 自己評価チェックリストの構築

2018年に作成した自己評価チェックリストは、保育所保育士指針⁵⁾を含めた先行研究⁶⁾の結果から保育士としての基本項目とともに医療にかかわる保育士の項目を追加して作成したものを全国アンケート調査に掲載して、自己評価を依頼した。アンケート調査とともにインタビュー調査の分析結果の内容を基に、項目内容の修正および医療保育に特化した内容の項目を18項目追加して再度2020年のアンケート調査に掲載し、病棟保育の自己評価チェックリストを完成させた。

病棟保育における自己評価チェックは、回答方法を2018年3件法、2020年4件法と変更しておこなったため単純な比較はできないが、高評価の項目、課題と思われる項目については抽出された。全体的に保育所保育士にも繋がる保育の根幹となる基本的な内容、特に子どもとのかかわりにおける保育項目において、2020年には95%以上が「ほぼできている」と回答している。その中で、保育の意図を保護者や他職種にわかりやすく説明することができているかについての2項目においては、「はい」・「どちらかといえばはい」が、保護者への説明が76%、他職種へ説明が78.5%と、相対的に割合が低かった。2018年の回答においても、両項目は同様に割合が低い。医療の中においては、保育の意図をわかりやすく説明することは専門性にも繋がる項目であり、重要な点であると考えられた。

(3) アンケート調査および自己評価チェックリストの結果による考察

2018年と2020年の調査結果より、多少の変化がみられた項目について考察を加える。病棟保育のキャリアとしては、2年間であまり変化はないと言えるが、直属の上司が保育士との回答の増加、病棟の保育業務マニュアルの存在の増加、多職種とのカンファレンスへの参加率の増加が認められた一方で、日常業務でベッドメイキングや配膳など補助業務と思われる項目が微減し、仕事を通じた自己肯定感が微増していたことから、医療の現場における保育の位置づけが定着しつつある病棟も増えつつあるのではないかと考えられた。しかし、看護師と協働できていると考える人が微減し、医療・看護に関する勉強会への参加が減っていたことから、他職種との協働や相互理解につながる取り組みについては十分に進展していない現状が窺えた。加えて、保育計画を立てる必要はないとする回答が増えていた点、また、自己評価チェックリストで保育の意図をわかりやすく伝えられている人が少ない点については、病棟保育に関するアドバイスをいただく助言者や指導者が周囲におらず、保育の質を担保するための機会が不足している現状が想定された。この点については、背景となる要因の追究も含め改善に向けて課題の明確化が必要であると考えられた。

(4) 自己評価チェックリスト(自己評価表)の周知

アンケートおよびインタビュー調査の分析結果から本研究の目的の一つであった独自に作成した病棟保育に特化した自己評価チェックリストを小児病棟に保育士が勤務している各医療機関に周知する必要性は明確となった。作成した自己評価チェックリストを使用し、病棟の保育士自身が定期的に自己評価をおこない、全国の病棟の保育士のアンケート結果から得られた評価基準値と照らし合わせ比較することが可能となるように基準値表を作成した。稀少職種においても、評価表と基準値表の比較を基に定期的に自己を振り返ることで保育の質の担保に繋がると考えられた。医療チームの中で、入院している子どもとその家族へより良い保育の提供を目的に、全国の小児病棟の保育士へ、改めて完成版として本研究で独自に作成した「病棟保育の自己評価チェックリスト」とともに報告書を送付した。

5. 研究成果の結論

2018年と2020年に、病棟保育の全国調査を2回にわたり実施し、現状を把握するための基礎データを得ることができた。また、2回の調査解析の結果、顕著な変化はあまり見られなかったため、今回の調査結果は現状を正確に反映した基礎データとなった。

全国的な視点で量的調査と質的調査を実施し、病棟保育の現状や課題を詳細に調査分析することで、医療保育の質に必要な要素を抽出することができた。そして、その結果をもとに妥当な評価表を作成することができた。さらに、評価表の慎重な検証を行ったことで、作成した評価表を実用的なものとして公開し、広く周知することができた。病棟保育士という稀少な職種が、評価表を用いた自己評価を客観的に行うことができるため、医療保育の現場における保育の振り返りや課題の抽出にも役立つと考えられる。また、評価システムによって医療保育の質を明確化することは、入院児とその家族への質の高い保育支援の提供とQOLの向上に貢献し、社会的な意義があるといえる。

今後は、評価表の改善を目指し、項目ごとに関連付けを行い、より詳細な分析を重ねていきたいと考えている。また、調査結果を基に、さまざまな研究や実践に活かし、医療保育のさらなる発展に寄与していきたいと思う。

<引用文献>

- 1) 宮津澄江, 笹川拓也, 入江慶太, 神垣彬子: 医療保育者養成の取り組みに関する現状と課題. 川崎医療短期大学紀要. 2009; 29: 59-64.
- 2) 金城やす子: 小児がん患児と家族に対する病院内での支援のあり方に関する研究. 筑波大学博士(ヒューマン・ケア科学)学位論文. 2008
- 3) 上出香波, 齋藤政子: 小児病棟における保育士の専門性に関する検討 - 医療保育専門士への面接調査を通して -. 保育学研究. 2014; 52(1): 105-115.
- 4) 長嶋正巳: 医療施設における病児の心身発達を支援する保育環境に関する調査研究. 平成17年度児童関連サービス調査研究等事業報告書. こども未来財団. 2006
- 5) 厚生労働省: 保育所保育指針 平成29年告示. 2017
- 6) 民秋言: 幼稚園教諭・保育所保育士・認定こども園保育教諭 保育者のための自己評価チェックリスト 保育者の専門性の向上と園内研修の充実のために. 萌文書林. 2015
- 7) 鹿島房子, 星野早苗, 東島明子, 他: 医療保育関連職種の役割-医療保育専門士と子ども療養支援士・HPS-. 医療と保育. 2016; 14(1): 4-17.
- 8) 石井悠: 速報版 病棟保育に関する全国調査. 東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター. 2016
http://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/project_report/survey/ (2018.8.10 アクセス)
- 9) 安達 智子: セールズ職者の職務満足感-共分散構造分析を用いた因果モデルの検討. 心理学研究. 1998; 69(3): 223-228.
- 10) R Core Team (2017). R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria, <https://www.R-project.org/> (2017.9.9 アクセス)
- 11) Kanda Y: Investigation of the freely available easy-to-use software EZR for medical statistics. Bone Marrow Transplantation 48,452-458,2013

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 上出香波 林典子	4. 巻 20-1
2. 論文標題 「小児病棟における病棟保育の現状-全国の病棟保育士に対する2年間のアンケート調査-」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 医療と保育	6. 最初と最後の頁 78-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上出香波 林典子	4. 巻 17
2. 論文標題 病棟保育士が考えるチーム医療の一員としての認識について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 医療と保育	6. 最初と最後の頁 p.42-p.51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 上出香波 林典子
2. 発表標題 病棟の保育士が考える子どもと家族のQOLに関する意識調査 小児看護との比較から
3. 学会等名 第73回日本保育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上出香波 林典子
2. 発表標題 小児病棟の保育士が抱える保育の課題について - 全国の小児病棟の保育士に対する調査結果より -
3. 学会等名 第8回日本小児診療多職種研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上出香波 林典子
2. 発表標題 病棟保育の現状について 全国アンケート調査の結果よりー
3. 学会等名 第71回日本保育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 上出香波 林典子
2. 発表標題 病棟保育士が考えるチーム医療の一員としての認識について
3. 学会等名 第22回日本医療保育学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 日本医療保育学会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 建帛社	5. 総ページ数 216
3. 書名 改訂 医療保育セミナー	

1. 著者名 小野次朗・榊原 洋一（編著）共著 上出香波 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ジアース教育新社	5. 総ページ数 184
3. 書名 幼児と健康-日常生活・運動発達・こころとからだの基礎知識-	

1. 著者名 坂本健・佐久間美智雄（編著）共著 上出香波 他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 280
3. 書名 シリーズ・保育の基礎を学ぶ 実践に活かす子ども家庭福祉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	林 典子 (HAYASI NORIKO) (00620444)	帝京平成大学・人文社会学部・講師 (32511)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------